

## 英語の間接使役表現

### —He built his houseを中心に—

キーワード: 英語の間接使役表現、間接使役メニミー構文、使役者と被使役者

金子輝美

#### 1. はじめに

日本で最初に Our teacher built his house in Nagoya in 1980. のような間接使役表現に触れたのは、筆者の管見によれば、月刊誌『現代英語教育』(研究社)に<漫談英文法>を連載していた江川(1964:33)である。「(...)大工さんに建ててもらうのだから、to have a house built であろう。事実、私もずっとそう思っていたが、to build a house も言うと聞いて、認識を改めたことがある(...)」という江川(当時、東京学芸大学)の率直な述懐は今も興味深い。なお He has built himself a house. という表現は、これよりも10年以上前にすでに小川・上野(1953)に見られるが、説明は加えられていない。これについては4.1節で説明する。

月刊誌『英語教育』(大修館書店)の Question Box 欄でこの表現が取り上げられたのは、今から45年も前の1969年のことである。解答者の福村(当時、北海道大学)は、海外の辞書・事典類から数例を引いて、He built his house 型表現が可能であると述べている。当時の解答者たちは、自らが英語圏で生活した体験に基づいて答えるのではなくて、書物に英語表現を求めたり、同僚の英語母語話者から情報を得て、それを読者に供することが多かった。このような表現はどのような場合によく使われるのかという実感をもって答える大学関係者は少なかった。

『旺文社シニア和英辞典』(1980)の別冊「—シニア和英辞典を使った—英文のじょうずな作り方」には、<「散髪する」型の表し方>という項目があり、「彼はひと月に2度散髪します」、「きみは時計をどこで直しましたか」など5問が出題されている。「日本語では<～してもらう>となっていないが、英語では必ず<have+目的語+過去分詞>を使って表さなければならない」という斉藤(当時、東京外国語大学)による解説があり、巻末に解答が与えられている。この解説では、間接使役表現の可能性は完全に排除されている。

最近では、日本語のこの種の表現の研究をしてきた佐藤(1997:50-55, 2005:88-98)(学習院大学)は、「山田さんが家を建てた」に相当する適切な英語表現として Mr. Yamada had his house built. を挙げ、\*Mr. Yamada built his house. には\*印を付しているのが印象的である。日英両言語において表現方法に根本的な差異があることに注意を促すためであろうか。英語表現の使用実態から見れば、必ずしも適切な解説とは言えない。

このような傾向は、最近の英語学習者向けの参考書にも見られる。たとえば、和洋女子大学の奥

津 (2000:126) は、一般的読者を対象にした『間違いやすい英語表現』に、誤文として (1) のような例文を掲げている。

(1) \*Last year he built his house in Kamakura.

正しい表現にするには、Last year he had his house built in Kamakura. というように、「have+目的語(物)+PP.」を使わなければならないと記している。「使わなければならない」という解説はやはり独断的過ぎると言えるだろう。また、同書では \*He cut his hair. も誤文として扱っている。だが、たとえば、日本の代表的学習辞書である『ジーニアス英和辞典』(1992<sup>2</sup>) には、「get (have) a haircut が普通。《略式》では自分で刈らなくても cut my hair を使うことができる」という説明が見られるという事実には筆者は注目したいと思う。

もちろん、He built his house 型表現を解答として示す日本人指導者もいる。たとえば、慶應義塾大学の田中 (2008:82) は、NHK テレビ講座の内容をまとめた参考書で、「祖父が 1940 年にこの家を建てた」に、My grandfather built this house in 1940. という英文を対応させている。

本稿では、この種の表現を Goldberg (1995) に倣って、「間接使役表現」または「間接使役構文」(Indirect Causative Construction) と呼ぶことにする。英語母語話者の反応を調べ、かなり多くの実例を観察することによって、この種の表現はどのような場面で好んで使われるのかを探りたい。関連して、build 以外の動詞が使われた間接使役表現、たとえば He cut his hair. / She buried her husband. なども視野に入れて、なぜこの形式が使われるのかを包括的に説明したい。

このような表現を取り上げることの意義について、念のため付言しておきたい。日々、英語を教え、英語の研究と学習を志向する私たちにとって、英語表現そのものに関心を寄せ、語彙や構文など英語の特質を一つ一つ具体的に明らかにしていく態度は忘れてはならない原点であると思う。どのような言語理論に沿って指導し、研究するにしても、このことは無視することのできない普遍的な原理である。本論は厳密な言語理論の形式化を求めるものではない。間接使役表現のありのままの姿を文脈の中で観察し、それがどのような場合に好んで使われるのか、それはなぜなのかを追求し、「彼は家を建てた」に類する種々の日本語が表わす意味(概念)を私たちは英語でどのように発信すべきかを、「表現文法」の立場から再考することを目的とする。

## 2. 間接使役構文の先行研究

### 2.1 日本語表現を対象とする研究

日本語のこの種の表現の呼称は一樣ではない。筆者の知り得る範囲では、佐藤 (1997)、須賀 (2000) は「介在性の表現」、「介在性の他動詞文」、山本 (2008) は「介在性表現」と簡略化し、鈴木 (2007) は「非行為者主語の他動詞構文」、澤田 (2008) は「介在性使役表現」と呼んでいる。

先学たちが例示している代表的な日本語例文としては、「エリザベス女王が宮殿を直した」(鈴

木)、「太郎が合い鍵を作った」、「浩が顔写真をとった」(佐藤)、「(車中の)客がタクシーを止めた」、「秀吉は大坂城を建てた」(鄭)、「(マッサージ店で)肩をほぐした」、「王監督はこの方法で胃を取ったのです」(澤田)、「ニクソン大統領は北ベトナムを爆撃した」(山本)などが挙げられる。これらの例文の共通点は他動詞文であり、例外もあるが、主語が自らを制御する意志をもつことである。たとえば「<sup>?</sup>人形がドレスを着た」は、人形は意志をもたないので、介在性の表現としては容認されにくいだろうと須賀(2000:26)は言うが、微妙な判断を迫られるところだ。「<sup>?</sup>赤ん坊は産衣を着た(風呂に入った、注射をした)」についても同じことが言える。

佐藤(1997、2005)は、この表現形式の基本的性格は「話者が実際には存在する被使役者を無視してあたかも主語自身がすべての過程を行ったかのように捉えられている表現」と規定している。これは原則的には英語表現にも当てはまる規定である。また、介在性の表現の成立には、「事態の結果のコントロール」と「動詞の意味的焦点」という2つの条件が関与していると指摘している。佐藤が挙げている和文で説明してみよう。たとえば「(洋服店で)彼女はドレスを作った」は事態の結果に焦点が置かれているので、介在性の表現として成立するのに対して、「彼女はセーターを編んだ」は「編んだ」という動作過程に意味的焦点があるので、「彼女は誰かにセーターを編ませた(編んでもらった)」という含意は生じない。「作る」と「編む」という語彙的意味に起因していることは確かだが、次の(2)のように文脈なしではどちらか判断できない場合がある。

(2) 父は壁にエアコンを取り付けた。

「取り付けた」のは誰なのか。もし業者であれば、業者は後景に退けられ、動作の結果に重点が置かれ、父親であれば、動作過程に重点が置かれていることになる。このように、日本語の介在性の表現の成立を動詞の語彙的意味にのみ還元することはできるとは限らない。なお、My father installed an air-conditioner on the wall にも、文脈によって2通りの解釈が可能である。5節(16a,b)の実例を参照されたい。

## 2.2 英語の間接使役表現

英語のいわゆる「使役構文」に関する論考は多いが、He built his house のような「間接使役構文」を中心に据えた本格的な研究は見られないように思われる。

45年前に Lyons (1968) は、I will have the work done. には、「その仕事を自分でする」と「他の人にやってもらう」という2つの読みができるのと同じように、I built a house. にも2つの読みがあることを(3)のように述べているが、それ以上の説明はしていない。

(3) *I built a house* is also interpretive in two ways ('I did the building of the house' or 'I got someone else to build a house for me').  
--Lyons (1968:397)

間接使役表現がなぜ生じるのかについては、Goldberg (1995) が直接使役表現を説明する過程で、例文を示し、示唆に富む説明をしている。また、Lee (2001) も例文を挙げているが、独自の見解は見られず、goldberg の理論を踏襲している。前者から5例、後者から1例を挙げる。

- (4) a. The invalid owner ran his favorite horse (in the race). --Goldberg (1995:169)  
 b. Chris cut her hair at the saloon on University Avenue. --*ibid.*  
 c. She painted her house (when in fact the painters did the painting). --*ibid.*  
 d. The company flew her to Chicago for an interview. --*ibid.*  
 e. Farmer Joe grew those grape vines. --*ibid.*  
 f. She buried her husband. --Lee (2001:96)

(4a) 馬主が騎手に愛馬の出走を託したり、(4b) 美容室で整髪したり、(4c) 業者に依頼して家主が自宅の塗装をしたり、(4d) 会社が社員を空路で商談に出張させたり、(4e) 大農園経営者が労働者を雇用して作物を栽培したり、(4f) 妻が夫を埋葬することは、すべて社会的に慣習化されている。「妻が夫を地中に埋めた」という文字通りの意味が、「夫を埋葬した」という意味に解されるのは、「土葬」という慣習が現存するか、過去の風習としての記憶が今も残っているからである。これらはすべて他動詞文であり、事実上の行為者である被使役者は言語化されず(脱焦点化され)、使役者だけが表面化している。

Goldberg (1995) は、このような言語現象は「まとまった概念として箱詰め (packaged) されていると認知されるので、その中の構造は無視される」と説明している。

- (5) That is, simple causatives can be used to imply conventionalized causation that may in actuality involve an intermediate cause. It seems that conventionalized scenarios can be cognitively “packaged” in such a way that their internal structure is ignored.  
 --Goldberg (1995:169)

この引用文に見られる simple causatives とは、have, get, cause などを使った直接的使役文ではなくて、間接使役構文すなわち He built his house 型表現のことである。(4) の各表現が違和感なく成立するのは、その背後に慣習化という言語外の要素が潜んでいるからであると、Goldberg は主張している。たとえば (4a) が成立するには、競馬が国民的スポーツとして確立していなければならない。だから\*The invalid owner ran his horse onto the field. とすると、間接使役表現としては成り立たないと Goldberg (1995:169) は述べている。「馬主自身の行為」として解釈されるからである。Lee (2001:96) も、同じ理由で、Mum flew me to London for a holiday. は間接使役表現としては認められにくいと言っている。「母が誰かに命じて息子や娘を休日を過ごさせるためにどこかへ飛行機で行かせる」ことは慣習化されていないからである。

### 3. 英語の間接使役表現の容認度の調査結果とその分析

澤田 (2008) は、関西言語学会第 33 回大会で、日本語の他動詞受益構文について口頭発表した際に、「英語の介在使役構文」という1節を設け、9例の英文についての英語母語話者 10 名の反応を調査している。筆者も澤田と同じ9例文に独自に1例を加えた 10 例文について、英語母語話者 20 名の感覚と反応を対象に調査した。調査対象の 10 例文は次の通りである。

(6) 調査対象例文(例1－例9は澤田、例 10 は筆者による)

例1. I built my house.

例2. I painted my house.

例3. I fixed my car at the repair shop.

例4. I cut my hair at the salon.

例5. I made a new suit at the tailor's shop.

例6. I pulled out my bad tooth at the dental office.

例7. I removed my mole at the hospital.

例8. I took my ID photo at the photo studio.

例9. I'm going to clean my suit at the dry-cleaning store on the corner.

例 10. The president in the backseat stopped his car.

容認度は、澤田と同じように、5段階を設定し、次のように容認の度合いを得点で表わした。

OK = perfectly acceptable (5点)

(?) = not perfectly but almost acceptable (4点)

? = somewhat unacceptable but may be possible (3点)

?? = almost unacceptable but not perfectly unacceptable (2点)

\* = perfectly unacceptable (0点)

この調査は、インフォーマントとしての東海地区に住む英語母語話者に直接会って、目的を伝えた後、その場で対象例文を示して答えを得るか、調査用紙を郵送して返答を得るかのどちらかの方法を採用して実施した。その際に、文法的見地からではなくて (not from your grammatical point of view)、日常生活での普通の用法 (your daily use) を教えてほしいと付記した。10 例文全部が OK であると答えた場合は合計 100 点になり、すべてに \* 印を付けた場合は 0 点になる。結果は表 1 のようになった。

表1 母語話者による英語の間接使役表現の容認度(2010年3月-5月に実施)

	性別	年齢	例1	例2	例3	例4	例5	例6	例7	例8	例9	例10
S 1	M	70s	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
S 2	F	30s	OK	*	?	OK	(?)	?	??	?	?	(?)
S 3	M	40s	OK	OK	OK	OK	?	?	?	(?)	(?)	OK
S 4	M	50s	OK	*	*	*	*	*	*	*	?	?
S 5	F	30s	OK	OK	OK	OK	OK	(?)	(?)	(?)	??	OK
S 6	F	(?)	??	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
S 7	F	60s	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
S 8	M	50s	*	*	*	*	*	*	*	??	??	(?)
S 9	F	50s	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	(?)	OK
S 10	M	60s	OK	*	*	*	*	*	*	*	OK	?
S 11	F	30s	(?)	?	?	(?)	?	(?)	(?)	(?)	?	*
S 12	F	40s	OK	OK	OK	*	*	*	*	*	(?)	OK
S 13	F	40s	(?)	(?)	?	?	(?)	??	?	(?)	(?)	*
S 14	M	50s	OK	OK	*	OK	*	*	*	?	?	OK
S 15	M	50s	*	*	?	?	*	??	?	OK	?	*
S 16	F	50s	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
S 17	M	40s	?	?	??	?	??	*	*	?	?	*
S 18	M	50s	(?)	??	??	*	*	*	*	*	*	(?)
S 19	M	60s	OK	*	*	*	*	*	*	*	*	OK
S 20	M	40s	??	??	?	?	??	*	*	??	?	?
合計得点 (100-0)			76	51	55	56	43	38	35	57	61	67

I built my house. (例1) を OK (perfectly acceptable) とする人は 20 名中 10 名で、(?) 印を付けて not perfectly but almost acceptable とする人は 20 名中 4 名いた。20 名によるこの表現の容認度 (合計得点) は 76% (76 点) で、10 例の中では容認度は突出している。なお、ここに掲示しなかったが、澤田 (2008) の調査では、この表現は 10 名中 4 名が OK、(?) も 4 名でおり、perfectly unacceptable (\*) と答えた人はいない。次に、The president in the backseat stopped his car. (例 10) が 67% (67 点) の容認を得ている。この表現は鄭 (2007:24) に見られる「(車中の) お客さんがタクシーを止めた」にヒントを得て、筆者が作成したものである。他の 9 例はすべて一人称主語なので、三人称主語を用いた表現に対する母語話者の反応も知りたいと思ってこの表現を調査対象に加えた。社長が自分でペダルを踏んで車を止めるという読みはできないということ、すなわち解釈上の紛れがなく、

状況を容易に想像できるということが、例 10 の容認度を高める要因になっているのかも知れない。

容認度が比較的低い表現について考えてみたい。I pulled out my bad tooth at the dental office. (例7)を OK とした人は 20 名中4名、全然認めない人は 10 名いた。容認度は 35% で、10 例中では最低であった。なお、澤田 (2008) の調査では、OK と (?) は 10 名中0名、? は3名、?? は5名、全然認めない人は2名であった。動詞句 pull out からは、「引き抜く」という動作過程を想像しやすいことが、間接使役の読みをある程度まで妨げているのだろう。英語母語話者数人に、“What would you do if you had a bad tooth and your dentist says it can’t be saved?” と口頭あるいは紙面に書いて尋ねたら、

(7) “I’d have it taken out.” / “I will have my dentist pull out my tooth.” / I will have the dentist remove it.” / “I’d agree to his pulling it out” / “I have it extracted.” / “I have an extraction.”

という返答が得られた。I will pull it out. に類する表現形式を用いた返答は皆無であったという事実は注目されなければならない。「歯科医院で歯を抜く」に相当する英語表現は *OALD* などの辞書類には “have+O+ pulled out” 型だけが載せられている。その次に容認度が低かった表現は、I removed my mole at the hospital. (例7) である。文脈が明瞭でない場合は、remove という動作に重点が置かれ、動作主は文法的主語 I であると感じられるからであろう。I made a new suit at the tailor’s shop. (例5) は、常識的には「私が自分の手で洋服店でスーツを作った」という意味にはならないので、間接使役の読みの方が優勢になるようにも思えるが、英語では「作る」という動作過程にかなり意味的重点が残されたままになっている。ある英国人大学教授に、He made a suit with his first salary. (初任給で背広を作った) という自作文を見せて、間接使役の読みの可能性を尋ねたところ、即座に「一万円札を何枚も使って背広を作った」という意味になり、funny に感じられるという答えが返ってきた。しかし、「本当にそうなのだろうか」という微かな疑問を筆者は今も内攻させている。今後さらに精査する必要があるように思われる。

10 例文すべてに \* 印を付けた人がいたのはなぜだろうか。「すべての文は現実にはあり得ないことを述べており、奇妙である」というコメントから推測すると、真実を表わさない文を例文として掲げて議論することに問題があるということなのだろう。この回答者には筆者の調査の目的が理解できなかったようである。余談になるが、敢えて友人の日本人会社員のコメントも紹介したい。たとえば「エリザベス女王は宮殿を直した」というような「あり得ないことを意味する変な日本文」をなぜいくつも使うのかという質問があった。何度も説明したが、この調査目的の真意が理解してもらえなかったことがある。

アンケート用紙に書き添えられたコメントで示唆に富むものを紹介しておきたい。ある英国人は I built my house. を perfectly unacceptable としているが、実は全面的に容認しないというわけではない。

(8) But I would say, for example, “We built our house in 1986”, where the time, position, etc.

are more in focus than the act of building. Because there are so many possibilities, I find it impossible to give an opinion about an isolated sentence like “We built our house”. “I built my house” is even more difficult, because house-building is a family decision, the singular subject is strange

このことは、I painted my house. (例2) についてもある程度まで言えることである。調査目的で作成した単独の文は、その文自体がすでに不自然に感じられることもあるということ認識することが必要である。この英国人は、cut one’s hair については、

(9) You’d better cut your hair; it is awfully long.

を例示し、The only interest is in getting the hair shorter. Who cuts it is irrelevant. と説明しているが、例4の I cut my hair at the salon. を同じように、perfectly unacceptable であると答えている。文脈が明らかにされていないので、回答が不可能であるという気持ちが込められているようにも思われる。

筆者はできるだけ自然言語のありのままの「一瞬の姿」を捕獲したいと思ってはいるが、それはかなり困難である。八木 (1996) が主張するように、「英語母語話者の直感」に迫るための効果的なアプローチを探らなければならない。

#### 4. 実例の観察

##### 4.1 他動詞 build を用いた間接使役表現の実例観察

これまでの読書経験や英語母語話者との交流では、build a house 型表現に出会うことが多かった。決して稀な表現ではなく、普通に見られる表現である(以下、例文の下線は筆者)。

(10) a. I’m thinking all of this because I’ve recently built a new house.

—Bill Gates, *The Road Ahead*.

b. “We are building something larger, better, newer,” Developers are responding to the demand.

—*Time*, May 12, 1986.

c. Jamie McGregor had built his house on a kopje, one of the hills overlooking Klipdrift.

—Sidney Sheldon, *Master of the Game*.

d. The painter had built this high house, a pagoda without dragons, on a slope of pines on the first of hills behind Greenwoods.

—John Updike, *Marry Me*.

e. I certainly remember one instance when Haraldsen had talked to me about a house he was building in a little island somewhere in the north.

—John Buchan, *The Island of*

*Sheep.*

- f. In this area, few people stay -- or stayed --at hotels. They built their own houses, or rented a native one for the summer, and took the whole family. -- *Time*, July 12, 1965.
- g. "Mr. Hanley wants to build a summer house in Tonganoxie."  
--Sidney Sheldon, *Morning, Noon & Night*.
- h. He will build me a house, a home with a garden on a hill overlooking the sea.  
--Erica Tachikawa, *Onion Tears* (translated by Kate McCandless)
- i. Mr Fox planned to build himself a home very near the village.  
--BNC [Miyashita 2011:144]

これらすべての実例では、「建ててもらおう」という気持ちよりも、「家を建てる」という事実とその結果に重点が置かれている。(10c), (10d) では、その時にはすでに家を建ててそこに住んでいたのである。「建てる」という過程よりも、「結果」に重点が置かれている。(10e) は文法的には先行詞と接触節の結合が強固なので、have 構文が入り込む余地はないとも言えるが、意味的には直接建築工事に従事した人たちの存在は当然のこととして無視されることがこの表現成立の真因である。(10f) では、1960年代の米国東海岸の避暑地の住宅事情が描かれている。避暑客たちはホテルではなく、自分の別荘を建ててそこに住むか、地元民の家を借りて住んだという事実を客観的に伝えるのがこの雑誌記事の目的である。(10a), (10b), (10g) などごく普通に使われる表現である。

(10h) と (10i) は、二重目的語構文 (Double-Object Construction = DOC, Ditransitive Construction) である。(10h) では、「将来私に素敵な恋人ができ、私のために素晴らしい家を建ててくれる」ことを夢想する少女である「私」の願いが表出されている。反面、建築業者たちの姿は全く視野に入っていない。build は、make, bake, cook などと同じように、創造動詞 (verbs of creation) に属し、対象人物への利益供与を表わす。これらの動詞には「移動」という意味概念が含まれているが、build の場合は、具体的移動ではなくて、「所有権」を授与すること、すなわち抽象的な移動であると解釈される。

最後の (10i) は、himself が him になることもあるが、Miyashita (2011) は、次のような BNC の検索結果から、再帰代名詞が使われることの方が多いと述べている。

**表2 pour と build の BNC 検索結果 (Miyashita 2011:146)**

	Normal pron. (percentage)	Reflexive pron. (percentage)	Sum
pour	83 (32.7%)	171 (67.3%)	254
build	38 (40.9%)	55 (59.1%)	93

なお、上掲の調査は、find, get, buy, cook などの動詞とともに実施されているが、ここでは pour と build の使用頻度だけを抜き出して紹介した。

すでに例示したように、build は himself や him のような目的語を欠く表現は非常に多い。このよう

な間接目的語句は脱落・省略されたものなのか、または (10i) とは出生を異にする表現で、最初から間接目的語句を伴わない性格のものであったのかは、現在の筆者には判断できない。

人家以外にも build+O 構文は、寺院、城郭、工場、原子力発電所、商店、ダム、道路、船舶、橋梁、記念碑、兵器などの建設や製造に使われる。動詞は build 以外では、erect, construct, raise, renovate, complete などが使われることもある。新聞報道や歴史書で重要視されるのは、動作または行為の過程ではなくて、その結果であるから、この形式が好んで使われるのである。

#### 4.2 他動詞 bury が使われた間接使役表現

build 以外にも、この形式では repair, fix, cut, paint, repaint, publish などが比較的によく使われるように感じられるが、紙幅の関係でここでは bury だけを取り上げてみたい。まず実例に目を向けてみよう。

- (11) a. “My dear Lousie, you’ve buried two husbands, I can’t see the least reason why you shouldn’t bury at least two more.” --W.S.Maugham, “Lousie”.
- b. PRESCOTT: Why are you wearing a suit?  
BLANTLEY: Because of the funeral.  
PRESCOTT: Whose funeral?  
BLANTLEY: A friend. He died. We buried him. -- *The Secret of My Success* (映画台本)
- c. Julia buried her mother at Memorial Park Cemetery in Kansas City.  
--Sidney Sheldon, *The Other Side of Midnight*.
- d. Clara heard again and again of Mrs Hewitt, who buried her husband in an economy coffin of some inappropriately cheap and porous wood, and claimed a rebate from the insurance, and of the equally wicked and abandoned Mrs Duffy, who had squandered a fortune on black crepe and gilt handles, through a sheer love of ostentation.  
--Margaret Drabble, *Jurusalem the Golden*.
- e. She had refused to have her husband cremated, not because she [...]. --*ibid.*

(11a) は、「旦那さん二人の葬式をしたのだから、さらに新しい旦那さんと娘さんの葬式を出さないと絶対には言えませんよね」と身勝手な主人公の女性に向かって、近所の女性が皮肉を言っている場面である。(11b), (11c) の下線部は、言うまでもなく、「遺体を埋める」という作業員の任務がその社会の慣習に従ってなされると、その行為は社会的意義をもつようになり、「葬儀を執り行う」という意味に拡大されることを示している。具体的な行為を表わす bury の意味が拡張され、ある程度まで抽象化されるのである。(11e) はその前の (11d) と比較するために、同じ小説から引用した。1967 年に発表されたこの小説の舞台である偏狭な因習が残る英国の田舎町では、土葬にするのが慣

例になっており、火葬はまだ慣習化していなかったので、to have her husband cremated という形式が使われていると判断したい。

### 4.3 自動詞文の日本語と英語の間接使役表現

佐藤 (2005:96) は、「自動詞文が決して介在性の文を成立させないという点はすでにみた通りである。これは、自動詞表現が基本的に動作主の行為のあり方を述べるものである点に原因がある」と記して、「\*監督、走りました」(野球の試合で監督が選手に命令して走らせた場合)は「介在性の表現」(間接使役表現)にはなり得ないと説いている。そのような傾向があることは確かであるが、これは必ずしも当を得た解説とは言えないと思う。次例のような日本語表現が普通に見られるからである。

- (12) a. 「原監督はこのような場合、よくバントするからねえ。今度も送るんじゃないの」  
 b. 「落合監督なら、ここは走ると思うよ」  
 c. 「私なら、ここは一球待ちますよ」(「もし私が監督ならば」を意味する解説者の言葉)

「バントする」、「敬遠する」、「走る」、「一球待つ」は、「打者に打球をバントさせる(待たせる)」、「投手に打者を敬遠させる」、「走者を走らせる」という意味であり、他動詞の性格が残存しているが、(12) では自動詞として使われている。このような場合、「バントさせる」、「送らせる」、「一球待たせる」、「走らせる」と言う人もいるということは、それほど確立度(完成度)は高くないと言えるが、文脈の支えがあれば、(12) のような表現は成立する。相手チームの監督の作戦を予想して、「ここは走ってくるんじゃないの」、「ここは敬遠すると思うよ」と言うことはそれほど珍しいことではない。走者の「走る」という行為、投手の敬遠のための「投球」が、主語である監督の行為であるかのように捉えられている。このような場合、英語母語話者たちは、\*Manager Hara often bunts in this case. / \*Ochiai will squeeze (make a sacrifice bunt). / \*I will let a ball go by. と表現することはないだろう。英語では S+V 構文、S+V+O 構文などの確立度が強固であることがその理由の一つに挙げられる。次に英語の自動詞文を取り上げたい。

- (13) a. We trot merrily along the lane, and find ourselves on an open common.  
 --W. Collins, "The Dream Women".  
 b. We gallop across the common, and follow the windings of a second lane. --*ibid.*

(13a,b) は、妻と私がそれぞれの馬に乗って、英国の田園地帯へ出かけた時の様子を現在形で描いている。言うまでもないことだが、騎手が馬を trot させたり、gallop させるのであるが、あたかも私たちが trot したり、gallop したりするかのように描かれている。「～が～を～させる」という他動性を

表わす意味構造が、下線部の We trot(gallop) という自動詞構文の中にはめ込まれている。We galloped through the woods. (*Cambridge International Dictionary of English*) は、「私たちは森林を馬に乗って疾走した」というように解釈するのが普通であるが、文脈によっては、「馬のように疾走した」という意味になることもあるだろう。『ウズダム英和辞典』は He galloped off across the grassland. に「彼は馬で草地を越えて走り去った」という和文を添えている。

## 5. He built his house 型表現と He had his house built 型表現の比較

2つの形式を用いた表現を対比して、両者はどのような場面で使われるのか、その意味はどのように異なるのかを見てみよう。

- (14) a. We're going to build a house next year.

--『徹底トレーニング英会話』(NHK ラジオ講座)、2008年2月号。

- b. I'm having her (=the ship) built at the Ishikawajima-Harima Yard in Japan.

--F.Forsyth, *The Devil's Alternatives*. [八木 1993:88]

- (15) a. Your hair is awfully long; you'd better cut it.

--英語母語話者情報。

- b. At Jennifer's suggestion, Jack Scanlon had bought a respectable suit to wear at the preliminary hearing. He had had his hair cut and his beard trimmed, and Jennifer was pleased with his appearance.

--Sidney Sheldon, *Rage of Angels*.

- c. I love your hairstyle, Jene. You must have had it done at the new place on Elm Street.

--『徹底トレーニング英会話』(NHK ラジオ講座)2008年3月号。

- (16) a. When the telephone was invented and was ready to use, hardly anybody cared to install one.

--C.Day, "Father Lets in the Telephone" in *Life with Father*.

- b. I am having the telephone installed, to be in touch with your friend Perryman.

--Gerald Bullett, *The Jury*.

(14a) は日常会話でごく普通に使われると思われる表現である。We're going to have (get) a house built next year. という堅苦しい表現は、このような場合は、あまり好まれないように思われる。(14b) では進行形が使われている。話者の責任において業者に造船を命じ、業者が今まさに建造中である。業者が話者の視野の中に入っている。(15a) はすでに筆者のインフォーマント(英語母語話者)によって指摘されているように、どこの理髪店のどんな理容師が散髪するかは意識されていない。それに対して(15b)では、「予備審問に出るために、散髪し、ひげを剃った」という容疑者の状態に重点が置かれている。(15c)では新しい美容室の美容師の技量が意識されている。(16a)では「電話を引く」という一種の抽象化された概念が表現されている。タイトルの "Father Lets in the Telephone" も若干抽象化された間接使役表現である。(16b)には「業者に依頼して電話を引く」と

いう予定が述べられている。「電話を引く」という具体的行為に重点が置かれた表現である。

3組の対比から、build one's house 型は行為の結果に重点があり、意味が比較的広く (general)、若干抽象的傾向を帯びる傾向があることを感知することができる。他方、have (get) one's house built 型は具体的・特定の (specific) 行為を表わし、その行為の過程に焦点が置かれている。たとえば、“Ouch! My tooth hurts. I'd better go have it looked at”. (NHK ラジオ講座『英語5分間トレーニング』2010年9月号) では、look at が行為の過程を示すので、build one's house 型の選択はあり得ない。また、Lanser said, “I would have her shot; I could lock her up.” (John Steinbeck, *The Moon is Down*) では、Lanser 大佐という権力者が I would shoot her. と言わないのは、shoot は「銃で撃つ」という個人的行為を表わすと解釈され、「銃殺刑にさせる」という法制上の含意が生じにくいからであろう。他方 I could have her locked up. では、係員の「錠を下ろす」という具体的行為が、「刑として監禁する」という一般化された意味に拡大される。

## 6. 間接使役構文の意味構造

間接使役表現として使われる He built his house. の意味関係と形式をスキーマ化すると、次のようになる。

- (17) 意味 建築主→発注・依頼→業者→(下請け業者)→「建てる」→完成・結果  
形式 SUBJECT + ( cause + agent + to ) + BUILD + OBJECT

建築主と業者は使役者(顧客)と被使役者(事業主)の関係である。家を建てる作業をするのは建築業者であることはあまりにも当然のことであり、どんな業者なのか、どのような工法を用いるのか、下請け業者はどこなのかなどは、通常は問題にされない。「誰がその家を建てたのですか」と尋ねられたとき、「大工さんです」と答えることはまず考えられない。

次に、英語の間接使役表現 He built his house. に内在する意味構造を見てみよう。

- (18) a. The carpenters built his house.  
b. He caused the carpenters to build his house. / He had the carpenters build his house.  
c. He had his house built.  
d. He built his house.

(18d) の He built his house. は、(18a),(18b),(18c) のそれぞれの意味を基盤にしている。(18a) の built と (18d) の built は意味のレベルが異なる。The carpenters built his house. における “built” という行為は具体的であり、表層的・単一的である。他方、(18d) の He built his house. の “built” は複合的・重層的であり、抽象化されている。極めて単純に考えれば、(18a)→(18b)→(18c)→(18d) と

いう方向で段階的に抽象化が進んでいると言える。

(17)の間接使役構文のスキーマを再度考えてみよう。“S+(caused + agent + to)+BUILD+O”において、小文字の(cause + agent + to)の部分が、結局は、どのような時に、どのような理由で、背景に追いやられるのかという問いに答えることが必要である。

## 7. 間接使役表現の特徴

文脈抜きで考えれば、かなり多くのS+V+O構文には、直接的使役と間接的使役の両方の読みが並存する。日本語で考えてみよう。たとえば、「パソコンを修理する」、「映画を作る」、「本を出版する」、「新曲をレコーディングする」、「国会議員立候補の届出をする」などの行為は、日本では他者に依頼することが多い。本人自身が絶対にしないとは限らないが、世間一般の常識では、他の人物が代行するので、間接使役表現が成立する可能性が高い。逆に、「署名する」、「出席点呼に答える」、「学校の宿題をする」などは本人がすべきことなので、間接使役表現は成立しない。旅客機の操縦を許されるのは、会社が任命した操縦士たちだけである。だから、「テロリストたちはパイロットにその旅客機を成田まで操縦させた」という意味を \*The terrorists flew the plane to Narita と表現することは通常はできない。もしこの表現が成立するとしたら、世間の耳目を集める事件として、テロリストとパイロットの使役関係が強く意識される場合であろう。

歌手が新曲をレコーディングして発表するには、その業界の技術者や宣伝部員の協力が必要である。映画を作り、発表するには、俳優や監督だけでなく、「縁の下の力持ち」とも言うべき多くの人々が関わっている。

(19) On February 17, 1967 the Beatles released a new single. [...] In January of 1969 the Beatles recorded the songs for a new album, “Let It Be”. However, the album was not released until May 1970. The Beatles made the movie “Let It Be”.

--Jeffrey L. Berglund, *The Beatles: Once and Forever*.

(19)から明らかなように、新曲のレコーディングの担当者や映画製作に関わる人たち、さらに広報部員たちはすべて無視されて、注目の的であるビートルズが主語の位置を占めている。新曲を出したり、映画を発表するということは、その意味が拡大されて、それを世に問うことになり、最終的にはビートルズが何らかの評価を受けることになる。

被使役者の行為(動作)が、単なる行為ではなく、拡大解釈されて社会的出来事として意義をもつようになることはすでに述べた。使役者と被使役者の関係と両者の行為の意味的特徴を平易な日本語の例で確認しておきたい。

(20) a. 業者が彼の自宅の増建築の作業をした → 彼は自宅の増改築をした

- b. 出版社の職員が雑誌に彼の論文を載せる作業をした → 彼は雑誌に論文を載せた
- c. 役所の職員が私の本籍を岐阜へ移す作業をした → 私は本籍を岐阜へ移した
- d. 行員が私の銀行口座を開く作業をした → 私は銀行口座を開いた
- e. 妻は夫の意向を察して上司に歳暮を郵送した → 夫は上司に歳暮を贈った
- f. 米空軍兵士が北ベトナムに爆弾を投下した → ニクソン大統領が北爆した
- g. 彼の後援会の会員が選管に市長への立候補の届出をした → 彼は市長に立候補した
- h. 監督が彼に体罰(暴力)を与えたので、彼は自殺した → 監督が彼を殺したのだ
- i. ナチスの兵士たちがユダヤ人を虐殺した → ヒトラーはユダヤ人を虐殺した
- j. 医師団の教授が陛下の心臓バイパス手術の執刀をした → 陛下は心臓のバイパス手術をされた
- k. 大臣の秘書が賄賂を受け取ったと言われている → 大臣はその収賄事件に関係していると言われている

(20) の左側の事項はすべて現場における具体的行為であるが、右側では現場の行為が拡張され抽象化されていることが大きな特徴である。「私は当座預金口座を開いた」を表わす “I opened a checking account.” (*Catch Me If You Please*. 映画台本) では、opened は「窓を開く」のような具体的行為ではなくて、話者の心の中で再解釈されたメタフォリカルな性格を帯びている。『旺文社和英中辞典』(1986)に見られる「彼は昨年本籍を横浜に移した」(He transferred his domicile to Yokohama last year.) についても同じことが言える。(20j) のような外科手術の現場では、執刀医師の技量が問われる。術後は、折にふれ、結果としての成否に関心が移される。

間接使役表現として確立度の高い表現と比較的低い表現があることを、日本語表現に基づいて考えてみよう。たとえば、「私は本籍を名古屋へ移した」では、籍を移す作業をする事務職員が完全に無視されていることが、その確立度を高くしている。「本籍を名古屋へ移させた(移してもらった)」と言うと、かえって不自然に聞こえることに注目したい。

卑近な例をさらに加えておきたい。歌手の小坂明子が歌う「あなた」という歌謡曲は、「もしも私が家を建てたなら、小さな家を建てたでしょう」という歌詞で始まる。「建てさせたら(建ててもらうなら)」とすると、不自然になる。建築業者の存在は完全に無視されているのである。

「父はいつもあの店で洗車する」、「今から洗車してくるよ」などでは、文脈がないと「自分で洗車するのか、洗車してもらうのか」は明らかではない。しかし、文脈があっても、「誰が実際に洗車という行為をするのか」ということは、最初から全然問題視されない場合もある。余談になるが、高校教諭をしていた頃、旺文社の模擬試験に「君はいつも自分で洗車するの、または洗ってもらうの」という意味を英語で表現させる問題があった。2つの構文とそれらの意味を対比的に捉えて理解しているかどうかを確かめるという観点からは、良問である。しかし、実際に He usually washes his car at that filling station. という英文に接した際に、多くの生徒は間接使役表現の読みの可能性を最初から排除してしまうような気がする。このことは、「先生は去年名古屋に家を建てた」を英語表現する際にも、本稿の「はじめに」で触れたように、“have(get)+O+built” 構文を絶対に使わなければならない

いという考えと軌を同じくするものである。できるだけ実際の文脈の中で英語表現そのものに馴染んでいくことによって、身につけた文法の知識も有効になると思われる。

たとえば「総理大臣は6千枚年賀状を書いた」、「大臣は答弁書を作った」などでは、その内実が第三者には曖昧にしか判断できない。自分自身で書いたのか、秘書や官僚が書いたのかは、明確には判らないが、責任者としての大臣に焦点が当てられる。これらの日本語表現は、間接使役表現としての確立度はそれほど高くないと言える。次の実例の下線部はどのように判断されるべきだろうか。

(21) My grandfather built a greenhouse at the end of his garden and made it a large butterfly-breeding laboratory. --John Murray, *A Few Short Notes on Tropical Butterflies*.

熱心な蝶の蒐集家であり研究者でもあった祖父が、実際に自分の手で蝶飼育のための温室を作ったのかどうかは、この実話的物語を通読しても筆者には判断できない。祖父の蝶舎が庭の隅に立っていたという厳然とした事実には作者の視線が注がれているのである。

英語の間接使役表現は、どのような場合に可能で、どのような場合に不可能なのかを、再度確認しておきたい。権力者の象徴としての王様 (The king) を文法的な主語に定めた英文を作成し、その容認性を判断するとき、何が問題になるのかを考えてみよう。

- (22) a. The king built high walls around his castle.  
 b. \*The king carefully built high walls with bricks around his castle.  
 c. \*The king takes out his dog for a walk every morning.  
 d. The king killed all the spies from outside.  
 e. The king built a bridge over the river.

(22a) が成立するのは、王様に関する百科事典的知識を私たちは持っており、王様自身が自分の手で城壁を築く作業をしたわけではないことは誰にも理解できるからである。しかし、(22b) では、carefully, with bricks が加えられたので、文法的読みと百科事典的知識に基づく読みとが衝突することになるが、結局は間接使役の読みは劣勢になることが予想される。なお、日本語では「王様はレンガを使って用意周到に城壁を築いた」は容認される。英語のように S+V+O 構文が強固に確立していると、carefully, with(out of) bricks のような副詞は述語の行為を修飾する。日本語ではそのような制約は相対的に緩やかである。(22c) は、「従者が毎朝、王様の犬を散歩させる」という意味で作成したが、そのようなことがその王国で慣習化された重大な事柄でない限り、成立しないだろう。「王様が、毎朝、自分で犬を散歩させている」という意味に解釈されるのが普通である。(22d,e) は、当然、絶大な権力をもつ王様の部下の行為であると解釈される。

英語の間接使役表現が可能になるのは、文法上の主語となる人物が広い意味での権力者であり、社会通念上あるいは百科事典的知識から、王様の命令であると容易に認識される場合である。



It seems that more people are getting tattoos these days.

--Stanley, Nancy et al. *Think in English*. vol.1.

f. 東横ホテルの違法改造は数年前からあったようだ。

It seems that Toyoko Inn hotels have been doing illegal remodeling for years.

--*International Herald Tribune*, February 1, 2006.

g. 彼は 34 歳で腎臓移植手術をした。 He received a kidney transplant at 34. --*ibid.*

h. 彼は 5 針縫ったことがあり、今でもその痕が残っている。

He had five stitches, and he's still got a scar. --Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden*.

i. あなた(患者)はこれから心臓の外科手術をするんですね。

You're going into cardiac surgery. --Sidney Sheldon, *Nothing Lasts Forever*.

(23) では、“have+O+PP” 構文が使われていないのはなぜだろうか。その理由として指摘できるのは、話者がこれらの事態(出来事)を伝える際には、真の行為者は脱焦点化され、「医者(などの専門家)に~してもらう」という気持ちを前面に出す必要を感じないからである。このことは、話者(あるいは使役者)が「意味上の真の行為者」(被行為者)への恩義や感謝の気持ちをもたない人間であるということの意味しない。英語の場合は、表1の調査結果から判断できるように、日本語より制約が厳しい傾向がある。上掲の日英語対比表現で、(23a) \*I operated my stomach. (23b) \*I treated my teeth. などの直訳文は成立しない。

ここまでは、多岐にわたる日英両言語の間接使役表現を対照的に観察した。次に英語の間接使役表現に見られる個々の特徴を列挙してみよう。なお、これらの特徴のいくつかは日本語の間接使役表現にも見られるのは当然のことである。

(24) 「慣習化している」、「歴史的共通認識がある」、「共同社会で重要な注目すべき出来事である」、「使役者と被使役者が存在する」、「被使役者が脱焦点化される」、「使役者に権力(支配力)がある」、「使役者に専門的知識や高い技能がある」、「再帰性、すなわち行為の影響が利益として使役者にはね返る」、「主として S+V+O という強固な他動性構文で使われる」、「述部が行為過程ではなくて、行為の結果を表わす」、「述部が表わす行為は抽象化される傾向がある」、「述部動詞の意味は複合的(二重構造)である」、「手段や様態を具体的に示す語句は使われない」、「I galloped across the field. のように、自動詞文に他動詞構文が組み込まれていることがある」、「文脈によって容認度が異なる」、「同じ文脈や状況であっても、個人によって容認度に揺れがある」

これらの特徴は、英語という個別言語に関わる要素と言語外の要素に分けられる。英語の間接使役表現の特徴をいくつか挙げたが、それらは相互に関連する傾向がある。文脈など言語外の要素、話者の視点、英語の S+V+O という他動性構文の三者が複雑に絡み合う中で、話者が間接使役表現を選択する。

(24) のように相互に関連性をもつ諸特徴は、英語の間接使役表現を成立させるための要因であると言えるが、もし厳密な成立条件を求めるとしたら、これらの諸要因のいくつかが具現された個々の事例に共通する特徴を過不足なく抽出しなければならない。ここでは、必然的に抽象度の高いスキーマを求めることを避け、極めて単純であるが、(25) のように、英語の間接使役表現の諸特徴を要約しておきたい。

(25) 使役者と被使役者が内在する他動詞構文において、言語外の要因で使役者に焦点が当てられることによって、実際の行為者(被行為者)は脱焦点化され、文法的主語の領域の中に取り込まれる。

日英両言語の認知メカニズムは根本的には並行的である。「被使役者が主語の中に潜在する」ということは、主として他動詞構文の中で、使役・被使役の関係に基づいて「構文的なメトニミー」が成立しているということである。本稿では、これを「間接使役メトニミー構文」(“Indirect Causative Metonymic Construction”)と呼ぶことにする。

なぜ「間接使役メトニミー構文」と呼ぶのか。念のため簡単に説明しておきたい。たとえば Nixon bombed Hanoi. (Lakoff & Johnson 1980:38) は、米国空軍の兵士を被使役者とする間接使役表現である。この文では、主語 Nixon は the United States Air Force pilots and soldiers を指示しているので、Nixon という語自体がメトニミーであると説明することも可能である。従来はそのように説明することが多かった。しかし、本稿では、メトニミー構造は Nixon という語彙のレベルでなく、節(構文)の中に存在すると考えたい。この種の他動詞構文によってメトニミー機能が発動されるのである。この間接使役構文の中には、スキーマとしてのメトニミーの一般的なメカニズムが潜んでいる。だから、たとえば、構文を若干異にする Nixon went over to Hanoi to bomb. という自動詞文では、「Nixon が米空軍のパイロットたちに Hanoi へ行かせて、爆撃させた」という読みはできない。Nixon 自身が Hanoi へ赴いたことになるからである。

本稿はメトニミーを論ずることを目的にしない。一連の山本論文(2008a, 2008b など)では、いくつかの表現が「構文メトニミー」として説明されているので、それらを参照されたい。筆者の理解の範囲内では、She heard the piano. のような「アクティブゾーン・プロファイルの不一致現象」、同じように不一致現象として扱われる Don is easy to please. などの例文で代表される tough 構文などには、「構文的なメトニミー」を認めることができるとこれらの論文では主張されている。筆者が用いた「間接使役メトニミー構文」は、山本論文に想を得たが、本稿では Our teacher built his house. のような表現の意味構造だけを視野に入れて説明した。

## 8. おわりに

英語の間接使役表現について、日本の教育現場における認識と英語母語話者の反応を確認し、

日本語表現の先行研究も参照しながら、文脈を伴う実例を観察した。そのあと、“have(get)+O+PP”構文との意味的比較を試み、意味構造を分析し、間接使役表現の成立に寄与する諸要因を実例に基づいて調査し、共通する諸特徴を要約した。しかし、厳密な意味において、その成立条件を求めることはできなかった。

「家を建てる」という出来事は、過去のことであったとしても、将来の予定であったとしても、実際には、結果としてのひとつの事態であり、人生の慶事であると捉えられることが多い。「家を建てさせた、建ててもらった」という作業過程や業者との対人関係を話者が感じるときは、I had my house built. と表現されるが、実際にそのように表現するのに適した場面は少ないように思われる。「工場を建てる」、「本を出版する」、「銀行口座を開設する」、「本籍を移す」、「論文を雑誌に載せる」など多くの表現では、被使役者の存在はほとんど感じられない。使役者を「図」(figure)、被使役者は「地」(ground)とすると、「ルビンの杯」で杯の存在が知覚されているときには、2人の人物の顔は全然存在しないのと同じように、間接使役表現では「地」である被使役者は視野の外に置かれる。「図」と「地」が反転したとしたら、それはもはや間接使役表現ではないということになる。

間接使役という言語現象がなぜ生じるのかという問題を追求するには、話者の認知メカニズムに加えて、言語使用の背景、すなわち文化や慣習などの社会的文脈が考慮に入れられなければならない。生きた談話の中で観察される He built his house 型表現の成立は、話者・外部世界・語用論的あるいは統語的制約の間の「相互作用」または「相克」の結果によって決定づけられる。敢えて比喩的に戯言を弄するならば、個別言語としての英語の間接使役表現の成立は、「言語内」と「言語外」という2つの要因の間の綱引きの結果によるということになる。

## 参考文献

- 江川泰一郎 (1964) 「漫談英文法(7) 使役動詞 have」『現代英語教育』第 13 巻第7号(10 月号)、32-33. 研究社.
- 福村虎次郎 (1969) 「彼は家を建てた」『英語教育』Q.B.欄、46. 第 19 巻第8号(11 月号)、大修館書店。(『続・英語語法事典』1976:320-321.大修館書店)
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- 今野芳雄・山川喜久雄 共訳 (1968) 『動詞 HAVE の諸相』(英語学ライブラリー 62)、研究社。(Gustav Kirchner, *Die Zehn Hauptverhen des Englischen im Britischen und Amerikanischen*, Max Niemeyer, 1952)
- Langacker, Ronald W. (1987, 1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. vols.I, II. Stanford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Miyashita, Ayako (2011) “On the Affinity of the Verb *Pour* with the Ditransitive Construction”. 『英語語法文法研究』第 18 号、143-157. 英語語法文法学会、開拓社.
- Lee, David (2001) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford University Press.

- Lyons, John (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- 小川芳男・上野伊榮太 (1953) 『高等英文法』、有精堂.
- 奥津文夫 (2000) 『間違いやすい英語表現』、三修社.
- 斉藤次郎 (1980) 「— シニア和英辞典を使った — 英文のじょうずな作り方」(『シニア和英辞典』別冊)、旺文社.
- 佐藤啄三 (1997) 「<患者が注射をする>: 動詞の意味的焦点と事態のコントロール」『月刊言語』第 26 巻第 2 号、50-55. 大修館書店.
- \_\_\_\_\_ (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』、笠間書院.
- 澤田 淳 (2008) 「日本語の他動詞構文と受益構文ネットワーク — 日英語の対照分析を通して —」、関西言語学会第 33 回大会、2008 年 6 月 8 日、会場: 大阪樟蔭女子大学.
- \_\_\_\_\_ (2006) 「日本語の授受構文のヴォイス的特性 — 「X が Y に V してもらおう」構文が有する「受動性」と「使役性」を中心に —」『日本認知言語学会』第 6 巻、139-148. 日本認知言語学会 (JCLA).
- 須賀一好 (2000) 「行為の主体に関する認識と表現」『山形大学日本語教育論集』、21-30. 山形大学教育学部.
- 鈴木容子 (2007) 「使役他動詞文の成立条件 — 語用論的な検討を中心に —」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 1 部第 156 号、217-225. 広島大学大学院.
- 鄭 聖汝 (2007) 「大坂城は誰が建てたか? — 使役連続性を超えて —」『神戸言語学論叢: 西光義光教授還暦記念号』、21-33. 神戸大学.
- 田中茂範 (2008) 『文法がわかれば英語がわかる!』、NHK 協会出版.
- \_\_\_\_\_ (1997) 「「意味の使用説」の再考」『月刊言語』Vol.26, No.10. 22-29. 大修館書店.
- 八木克正 (1993) 「所有・使役・経験の have」、『英語基礎語彙の研究』87-97. 英宝社.
- \_\_\_\_\_ (1996) 『ネイティブの直感にせまる語法研究』開拓社.
- 山本幸一 (2006) 「「関連性」による意味拡張としてしてのメトニミー」『日本認知言語学会論文集』第 6 巻、299-308. 日本認知言語学会 (JCLA).
- \_\_\_\_\_ (2008a) 「介在性表現の分析 — 非自立型メトニミーとして —」『日本認知言語学会論文集』第 8 巻、116-126. 日本認知言語学会 (JCLA).
- \_\_\_\_\_ (2008b) 「「アクティブゾーン・プロファイルの不一致現象」の構文メトニミーとしての分析」*KLS* 28. 305-315. 関西言語学会 (KLS).

## 追記

- ① 本稿は、2009 年 10 月 24 日に、龍谷大学で開かれた英語語法文法学会第 17 回大会で、「He built a house 型表現はなぜ好んで使われるのか」と題して口頭発表した際の原稿に、大幅な修正を加えたものである。
- ② この種の表現の容認度の調査では、東海地方の大学に勤務する英語母語話者の好意的な協力が得られたことに感謝したい。また、筆者のぶしつけな依頼を快諾され、複数の母語話者と直接面談して、その調査結果をお寄せいただいた、山田伸明先生(中部大学)、大島直樹先生(愛知学院大学)、掬川知子先生(愛知大学)のご厚意に心から感謝したい。
- ③ 本稿は、教員生活の最晩年を迎えた筆者が、今は亡き堀内俊和先生との懐かしい思い出に浸りながら、今も変

わらぬ謝恩の念とともに執筆したものである。個人的懐古談で貴重な紙面を費やすことを許していただきたい。

入学当初の先生のご講義のテキストは、Functional Sentence Perspective (FSP) の提唱者として知られるチェコスロバキアの機能主義言語学者 Jan Firbas (1992), *Functional sentence perspective in written and spoken communication* であった。完読後は、関連して L.Chafe, T.Givón などの抜粋プリントが与えられ、幅広い視野から機能文法、談話文法などを学ぶことができた。1996 年1月、ご講義終了後、先生は「来期は何を読みたいですか」と私ども受講生に問いかけられた。筆者の希望を申し上げたところ、「私もその分野には興味があります」と言われ、快く受け容れて下さり、R.W.Langacker (1991) の *Foundations of Cognitive Grammar, vol.II* を読むことになった。一字一句を疎かにせず理解・音読し、段落全体の意味を的確に把握することが求められた。懇切なご指導にもかかわらず、この分厚い著作は、私どもの努力不足と非才のため、2年目に入っても、最後までなかなか読み切れなかった。「vol.I も読む予定でしたが、時間がありませんね。5限目に一緒に読んでもいいですよ」というお言葉を先生からいただき、ご厚意に甘えて同書の vol.I を暗くなるまで精読することになった。

これを機に、Langacker の認知言語学への傾斜をますます鮮明にしていっていった学友の一人は、当時を振り返って、「あの頃が一番楽しかった。私の生きがいになっていた。私が一番先生を煩わせ、一番お世話になった。認知言語学専攻者でも、私の交流関係では、これら2冊を読破し、きちんと理解している人は少ないような気がする」と述懐している。先生は筆者に「私も予習で大変なですよ。金曜日にはいじめられますのでね。特に木曜日は夜遅くまで何度も読み返しています」と冗談交じりに言われたことがあった。これは予習不足で愚問を發することの多い筆者への「もっと勉強なさいよ」という思いがこめられたお叱りの言葉であったに違いない。多くの理解不十分な箇所を抱えたまま筆者が出席した金曜日の講義室には、テキストへの書き込みはほとんどなく、講義ノートも辞書類も一切持参されることなく、平易な言葉で整然と要点を説明される精悍な先生の姿があった。大学という最高学府においても、英語をどのように教えるのかという技術的なことについて熟論が交わされる昨今であるが、そのようなすべての議論を超えて、先生ご自身のすべてがまさにすぐれた教授法そのものであったと筆者は今も信じている。

1年に2回くらい、主にご講義終了後に開かれた先生を囲む小宴では、多岐にわたる世間話に加えて、読書の際に得られた種々の英語表現を中心にして話題が盛り上がるがあった。当該表現に関しては、「よくは判りませんが、“He built himself a house.” という表現がありますね」と言われた先生の穏やかな笑顔が思い出される。先生は強い学問的信念を秘めながらも、英語表現に関しては、いつも慎重で、控え目な発言をされるが多かった。話題にされた英語表現について、かなり月日が経ってから、「こんな表現がありましたよ」と文脈を伴う実例が記された紙片を渡して下さることがあった。

先生は、筆者と生年月日がおおよそ2ヶ月異なるだけの同年齢である。ご趣味の一つは、奇しくも筆者と同じ蝶類の採集であった。お若い頃の沖縄への家族旅行の思い出を綴った紀行文(英文)には、枝先で翅を休める南方系の大型蝶オオゴマダラに話しかける2人の幼いお嬢さんの愛らしい姿が活写されている。随筆「クロコマチョウ」では、校舎内に迷いこんできたクロコマチョウ(薄暗い樹林に棲むヒカゲチョウ科の大型種)への愛惜の情とともに、周辺の宅地開発によって自然が破壊されていく現代社会への危惧の念が表出されている。

本学図書館の雑誌閲覧室には、先生が採集された蝶が収められた複数個の標本箱が展示されていることをご存知だろうか。蝶たちは朽ちることのないその端麗な姿で、いつも無言で筆者を迎えてくれる。里山を越えて深山に分け入り、無心に捕虫網を振られる先生、大自然に孤身を寄せて真昼間のひとときを樹下で憩う先生—若き日の先生が今もここにおられるような気がしてならない。

先生が忽然と永遠の旅立ちをされたのは、忘れもしない2001年2月27日の夜のことで、お別れの日、梅花が咲き匂う古い家並の小路を齋場へ向かった…。そして、あれから、何年経ったのだろうか。時は流れ、季節は巡り、早くも13年目の梅花の季節を迎えようとしている。大学院開設25年という節目にあたり、万感をこめて、天国で今も私どもを見守って下さる先生に、近況報告に代えて謹んで拙稿を捧げます。